

広  
報

# おおむら

人口8万人到達  
記念特別号

No. 1195



皆さんはじめまして

8万人目の市民

村上  
むら かも

開くんです  
かい



# さらに10万人へ

＝ 人口8万人に到達・県内随一の伸び率 ＝



甲斐田市長から認定証を受け取る村上祐介さん

昭和17年2月11日の市制施行以来、大村市の人口が平成7年10月16日、8万人を突破しました。

8万人目の市民となったのは、古町1丁目の村上祐介・若葉さんご夫婦の子ども開くんです。10月10日に生まれた開くんの出生届を、16日朝お父さんが市民課に出されたとき、遂に8万人に到達しました。

甲斐田市長から認定書や記念品が贈られ、居合わせた市民の皆さん、職員の間からお

祝いの拍手がわきました。村上さんは「8万人達成が近いのは市役所に来るまで知りませんでした。よい記念になり光栄に思います」と喜びながら話されました。

大村市の人口は、昭和17年2月の市制施行時には約5万6千人。最近2年間は、年約1千600人のペースで増え続けています。

人口増加の要因として、大村市は潤いと安らぎのある生活環境や自然環境に恵まれ、県央都市として将来の発展が

見込まれていることが主な原因です。交通網の充実、福祉の充実、下水道の普及率の高さなどがあげられます。

8万人到達は、長崎、佐世保、諫早に次いで4番目です。

人口7万人を突破したのは昭和61年6月。7万人の市民となった村田美紀さん（鈴木小3年生）が11月19日、お祝いのため村上さん宅を訪れました。

開くんと初めて対面した美紀さんは、「大きくなってく



お母さんに抱かれた開くんと対面した村田美紀さん

ださい」と顔を覗きながら、やさしく声をかけていました。

## 8万人到達日あてクイズ

### 3人が到達日を当てる!

「8万人到達日あてクイズ」を実施していましたが、応募者総数415通の中で、見事、到達日「10月16日」を当てた人は3人、惜しくも1日違いの人は7人という結果でした。次の10人の人に記念品が贈られました。

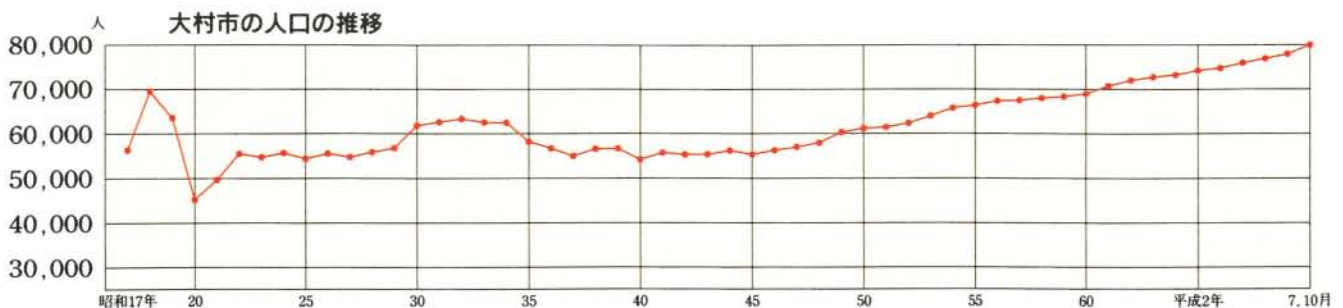
(敬称略)

#### ★到達日を当てた人

- ・柴田孝子・藤川智絵・岸川登美子

#### ★到達日(前後)の人

- ・大鏑律子・棚倉正憲・土井フヂ・福本奈保子・梅崎猛・高橋直子・今岡一生





# 歴史に見る大村の移り変わり

明治10年、東京都の大森近くを走っていた汽車の窓から、畑一面に広がる白い物を見つけた1人の外国人によって、日本では初めての縄文時代の貝塚が発見されました。

発見したのはモースというアメリカ人の生物学者です。これ以降、「日本人は、いつ、どこからやってきたか」について、活発な研究が行われました。今盛んな考古学や民族学は、日本人の起源論、民族論によって始まったのです。さて、大村に人が住み始めたのはいつからでしょうか。

## 最初の大村人

東彼杵町千綿に井手寿謙というお坊さんがいました。その人物が大村市の野岳堤で、

細石器と呼ばれる旧石器時代(約1万2,000年より以前)終末の石器を発見したのは昭和21年のことでした。

その後の調査で、さらに古



舟状木製品 (黒丸遺跡・約2,500年前)

い旧石器時代の遺跡や石器が市内で発見されていますが、少なくとも約2万年前には大村に人が住み着いていたことが分かっています。しかし、この時代は山野を移動して暮らす生活であったので、いわゆる大村人とは異なっています。大村に定住する人々が現れるのは、縄文時代の終わりごろ(約2,500年前)のことです。

大陸から稲作農耕が伝えられたため、水辺や湿地帯の周辺に人々が住み始め、定住するようになりました。これが大村人の始まりです。この時代、郡川下流の沖田・黒丸地区に集落がつくられています。その代表的な遺跡が「黒丸遺跡」です。



富の原遺跡出土 鉄戈・鉄剣

これに続く遺跡が弥生時代中期から後期前半(約2,100〜1,800年前)にかけて栄えた「富の原遺跡」です。この遺跡からは、北部九州(福岡・佐賀県)で作られたと見られている鉄戈や鉄剣が出土しました。この遺跡の特徴は、それまでの長崎県地方の文化的伝統を受け継ぎながら、一方では北部九州の文化的影響を強く受けていることです。

## 大村氏の時代

やがて大村氏が登場して統治し、戦国時代末期の18代純忠の時代に大村は世界史の中に登場します。城は市の南部の三城に造られ、城下が形成されました。また、キリスト教の教会が造られ、ルイス・フロイスや少年使節を計画したヴァリニアーノなどの宣教師が大村を幾度も訪れ、南蛮文化が大村にもたらされました。

フロイスの記録では、この時期の大村領(大村市と長崎市を含む旧東彼杵郡・旧西彼杵郡)には、約6〜7万人が住んでいたといわれています。その後、城が玖島に移ったことから、市の中心部は玖島・本町周辺になり、また藩内の家臣を城下に多く住まわせたことや、生産力が増加したことから人口が増えました。幕末の大村藩の人口は約11万人で、そのうち現在の大村市の地域には約2万人が住んでいました。

これからすると、純忠の時代には約1万人程度が大村市に住んでいたものと推察されます。大村の都市が大きく変わるのは、明治後半からです。大村に陸軍が創設され、やがて海軍航空隊、そして東洋一といわれた海軍航空廠ができたことにより、人口は急激に増えました。昭和15年には約3万3,000人、空廠ができた後の昭和18年には約6万9,000人と膨れ上がりました。特に、軍の施設が置かれた場所は、江戸時代までは人が住んでいなかった放虎原を中

## 近代の大村



大村空港時代



大村歩兵第46連隊 大正10年ごろ

心とした一帯でした。大村は「軍」の配備により、大きな影響を受けることとなりました。



戦前の大村



# 8万人への歩み

昭和17年市制施行以来、53年目にして人口8万人に到達。ここでは、市制施行後からの歩みを簡単に振り返ってみます。

## 昭和17年2月11日 市制を施行

明治4年、廢藩置県が公布。明治22年、町村制度が施行され、大村市の前身である1町8か村が独立した自治行政区画を形成しました。

その後、大村と大村町が合併。さらに、昭和14年に大村町と西大村、竹松の2村が合併しました。

そして、昭和17年2月11日

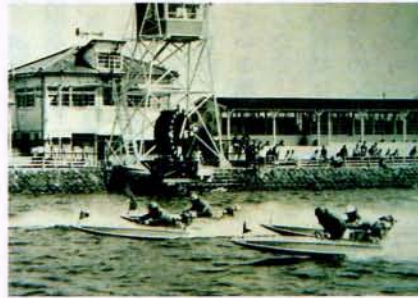
## 戦後20年代の大村

戦争が終わった昭和20年には、人口は4万4,292人と、市制施行時より約1万人近くまで落ち込みました。しかし、引き揚げや復員などにより、2年後には市制施行当時の人口まで回復しました。

道路整備などの公共事業へ出資をはじめ、国民健康保険事業、新教育法による6・3制の整備などに支出が年々増え赤字決算が続きました。そのような中で、昭和27年、財源確保のため、全国で初めて「モーターボートレース」を開催しました。

## 全国初のモーターボートレースを開催

昭和27年に開設された大村ボートは、その後、時代の流れ、ボートファンの要望も含め収益の増収を図るために、昭和44年新しいスタンドを完成。昭和52年には、一般会計への繰り入れが、これまでの最高の約30億円と市の財政を潤しました。



しかし、レジャーの多様化などにより、年々ボートの収益も減少しました。そこで、ロイヤルスタンドの建設。さらに、大型映像装置の設置など取り組みながら、誰にでも楽しめる娯楽として、明るい環境の魅力的な競艇場づくりを進めています。

大村町と三浦、鈴田、萱瀬、福重、松原の1町5か村が合併。ここに、全国で188番目、県下では5番目に市制を施行し、「大村市」が誕生しました。

30年、陸軍歩兵36連隊が駐屯したこと。さらに、大正12年大村海軍航空隊が設置。そして、昭和16年に大村海軍航空隊に隣接して、第21海軍航空廠が設置され、人口が急増した結果といわれています。ちなみに、市制施行当時の人口は、5万5,901人です。

収益事業のモーターボートレースの増収が伸び悩み、昭和31年、地方財政再建整備法の適用により、赤字再建団体となりました。



昭和32年の大水害

## 30年代は再建の時代

さらに、昭和32年には、未曾有の集中豪雨による大水害に遭い、壊滅的な打撃を受けました。しかし、市民一体となった復旧活動により、短期間の内によみがえり、近代的な市街地が形成されていきました。

8年間という自治庁監督下での行政運営は債務が完了し、昭和39年度から、独立で再出発しました。

この間、企業誘致にも力を

## 40年代は 企業誘致を推進

昭和30年代後半から、国民所得倍増論により個人所得の伸びは著しく向上しました。しかし、京阪神・名古屋方面への人口流動により、昭和45年ごろには、人口が約5万6,000人に減少しました。人口の流出を防ぐために、

昭和34年、九州電力大村発電所が操業。同年、長崎県の空の玄関として、大村空港が開港しました。30年前半の人口の伸びは、目を見張るものがあり、昭和34年に約6万1,000人を記録しています。

さらに、企業誘致に取り組みました。このころ、大村に工場を設置した企業の中には、現在、商工業発展の推進的役割を果たしている工場もあります。



## 50年代は

### 交通網の整備に取り組む

昭和50年、世界で初めての海上空港が開港。国際化時代の幕開けを告げるとともに、長崎県の空の玄関口としても役割を果たすようになりまし

た。東京、大阪方面はもちろん、中国・上海の定期航路が開設。利用客は着実に増加しています。

## 60年代—現在

### 躍進する大村市

昭和61年6月、人口が7万人になりました。平成2年には、長崎自動車道・大村く武雄北方間の開通など、高速道路の整備が進むとともに、大村ハイテクパークに県工業技術センターが開設。先端技術産業の導入と地域企業の高高度化が着々と進んでいます。市制50周年を迎えた平成4年には、「花と歴史と技術のまち」をテーマに、活力ある県央都市をめざして、多彩な記念事業を展開しました。

平成5年には、県央地域が「地方拠点都市」の指定を受

長崎自動車道の大村く多良見間が開通。物流拠点都市づくりに拍車がかかっています。

また、大村・鹿島線が国道に昇格、全線開通に向けての工事が進んでいます。

このような中で、人口も増加。昭和59年には6万9,000人余りと、7万人到達が目の前となりました。

け、輸入促進地域（FAZ）の指定、またオフィスパーク大村（オフィス・アルカディア事業）は、長崎空港と併せて長崎自動車道大村インターチェンジに近接するなど、交通アクセスや立地条件に優れた環境のよい場所にあります。現在、事務所・研究所などの施設の集積を図るため、造成中のオフィスパーク大村団地は、平成9年度の分譲を目標指しています。

### 医療と住環境の整備を



佐竹 茂さん

去年10月、人口8万人を記録した。本市にとっては、心なごむ朗報である。軍都として約6万余人を抱えた人口が、終戦によって4万余人に落ち込んだ。50年を経て、ようやく倍増となった

わけだが、やや遅足の感は拭いえない。

昭和末期から平成にかけて、国内の経済は狂気に近い発展ぶりをみせた。

当時の首長、担当者は「誘致」というバスに乗り遅れまいと奔走したが、市民が評価する企業は姿を見せなかった。

元市長大村純毅氏が話されたは、「大村は長崎と佐世保の間にある。両市は大陸に向けて「良港」を持ち、そのうち、高層ビルが林立する都市とな

る。両市の模倣は致底無理である。自然体で生きる以外に活路を見いだすことはできない」と言われていた。

今後の都市づくりは企業都市でもなく、工業都市でもない。高齢化していく国勢の中から見いだすものは、医療都市と住環境の整備である。

他市に比べ、国、公立病院、特色ある医院など、また、患者と密接につながる看護体制も万全である。これほど、整った医療機関は他市にない。

課せられた都市づくりは、ここから生まれるものと期待したい。

と誠に手厳しい。低調な学風に淡窓は、学生たちの成績を毎月1日には廊下に張り出し、公表した。まさに現在の進学校並みの迫力である。

### 淡窓の見た大村人気質



久田松和則さん

一昨年から一般市民対象に「平成五教館塾」が始まった。中央の著名識者の講演に大変な好評を博している。

その塾名もなっている五教館は、大村藩の藩校であっ

たことは、いまさらいうまでもない。今日、塾名に使用されるべき学校なのである。

ところが、天保・弘化年間

の幕末に、二度にわたって五教館に招かれた日田の学者・

広瀬淡窓は、五教館および大村人の気質に痛烈な批判をあ

びせた。「大村人には学問を好む人少く、文教振わず、五教館の学風は、古典の訳読のみで、詩文を作ることなく、博覧の意識に欠けている。」

しかし、大村人にも意地があった。この淡窓のしつた激励のかいあってか、その五教館から幕末・明治維新に数多くの人材を輩出する。

人口8万人。人が増えるほど、その地域の歴史を正しく伝えなければならぬ。歴史博物館の適切な場所での、早期実現を望んでいる。

## 10万都市をめざして

### めざして

昭和17年、わが「大村市」が誕生。戦後の復興期、高度成長期、オイルショック低成長時代、バブル崩壊など、まさに激動の時代を経て成長してきました。

その間、市民の皆様方、大村を愛し、ふるさとを大切に思う諸先輩方のご指導、ご協力のたまものと感謝いたします。

今後、長崎県央の交通物流拠点都市としての基盤整備と、美しい自然や豊かな歴史を大切に、住みたくなるまちづくりをめざし努力をしていきたいと思ひます。



躍進する大村市



### 花と緑のある 大村のまちに

「人口8万人」といわれ、僕には実感がわいてこない。僕が生まれて16年の間、大村は少しずつ変わってきた。僕がつかなくなったのは、あまりにも自然すぎたのかも知れない。

幼いころの記憶をたどってみると、大村の変化がすぐわかる。よく真ん中を通って帰った田畑は住宅地に、カブト虫やクワガタを採りに行っていた雑木林は道路となり、あまり変化のなかった我が家の周囲も、道路建設のために立ち退くことになった。

大村が発展していくのはとてもよいことだと思う。けれども少し寂しい気もする。「僕が小さかったころの大村はもうないんだなあ」と、大村の未来を握っているのは僕たちです。僕は大村市民として、人と自然に優しい「花



烏谷 透くん・16歳  
(大村高校1年)

### 歴史文化を考え たまちづくりを



久富雅美さん・48歳  
(活き活きおむら推進会議)

地方都市の個性が要求される今、私たち活き活き大村推進会議は、すてきな文化都市づくりのため、「平成五教館塾」に力を入れています。天正遣欧少年使節など、ほかには類をみない素晴らしい歴史文化を抜きにしては、大村の発展は考えられないからです。文化が人をはぐくみ、人が歴史をつくっていききます。

将来を担う子どもたちのため、市民のために、今以上の暖かみのある住環境を整えることはもちろんですが、24時間空港、橋の架かった美しい大村湾、高速度道路、新幹線と長崎の県央都市として経済の中心となり、観光地やスポーツの地としても、日本はもとより、アジアへも名を馳せるようになるのも、夢ではないような気がします。

日本経済も不安定な様相を

と緑のまち大村」を守ってきたい。現在、大村で暮らしている人とこれから大村で暮らす人のためにも…。

### もっと魅力的な まちづくりを



岡成久美子さん・30歳  
(主婦)

牛乳パック・プラスチックバッグ・トレー・ペットボトル・アルミ缶・スチール缶・透明瓶・茶色瓶・緑色瓶・乾電池・古新聞・古雑誌…我が家の分別箱の内容です。私がリサイクルや省資源と、格別の意識があるわけではなく、今更がそうだったから、習慣として身につけてしまっています。

これまでに4か所の町（いずれも長崎県外）に住みましたが、どこもゴミ収集には、独自のルールがありました。しかし、大村は分別収集が少ないようです。人口が、これからますます増加する町ならば、今から回収システムを

なしてきていますが、苦しい財政の中でも大事なものを失うことなく、目の前にきている大村の21世紀を、生き生きとも目にしたいものです。

### ボランティア活動で 住みよいまちを

言語障害児・者の治療などを担当する言語療法士を志す学生を指導するために、大村にきて約3年がたちます。おかげさまで仕事を通じ、多くの人とも知り合うことができ感謝しています。



為数哲司さん・34歳  
(長崎リハビリテーション学院)

私の好きなことばに、「一期一会」があります。また私が一番好きなものは笑顔です。この二つを満足させてくれるのがボランティア活動です。私の所属する学校には、年間を通じていろいろなボランティアの依頼があり、学生も忙しい時間を割いて積極的に参加しています。そして参加するたびに学生たちも前述した

定着させるべきだと思います。また、住宅造成中の場所が随分見られますが、思い切った電線を地中に埋め込んだらいいかでしょうか。せつかくの広い青空が台無しですもの。もう出来上がった町ではなく、これから発展する町だからこそできることがたくさんあると思います。もっとすてきな魅力的な町になって欲しいですね。

### みんなで明るいまち づくりを考えよう

大村市青年農業者会の会員

10万都市へ向けての歩みはもうはじまっています。そこで、10人の皆さんにこれからの大村について考えていただきました。

## ぐそこに… こんな大村に なってほしい

## 21世紀はす こんな大村に なってほしい

二つのこと、またはそれ以上のものを得ているようです。ボランティア活動は、特別なことではなくだれでもできることです。大村がより住みよいまちになるためには、生活環境が整備されるだけでは不十分です。心豊かなまちにするための一つに、皆さんの積極的なボランティア活動への参加を望みます。

### すばらしい自然に 恵まれたまちに



鶴田真里子さん・12歳  
(玖島2丁目・大村小6年)

私たちの大村市は、美しい大村湾と緑に囲まれた自然豊かな町であることが自慢です。それに加えて、大型店や大



中村勇一さん・28歳  
(大村市青年農業者会)

は減少の一途をたどり、現在私を含め20人で活動しています。また、新規就農者も年に一人二人といったところです。このことから農業後継者育成の早急な対策が必要不可欠であり、市の協力をあおりたいと思います。

今日、私たちの主食である米は、平成6・7年度米とも豊作で、余る傾向にあります。平成5年度のような長雨による冷害や農業者の高齢化による労働意欲の減退、また、世界に目を向けると中国は、穀物輸出国から輸入国へ衰退といったように、予断を許さない状況です。

経済発展優先で、自然は汚されバランスを失いかけています。また自然が病むとき、人もまた弱っていきます。そんな混とんとした時代の中で21世紀に明りをとすのは、市民一人ひとりが、もっと未来をよくしていこうと思う心だと思っています。

### 在宅福祉サービスの 充実したまちに

高齢化および長寿化が進展する中で、福祉サービスの需要が急速に増大しています。在宅福祉の中核を担うホームヘルパーに対する、地域住民の期待がますます高まる中、福祉施策も大きく変化しようとしています。



安田フミ子さん・52歳  
(協和町・ホームヘルパー)

ホームヘルパーになって13年、いろいろな利用者との出会いと別れ、また戦後50年といいますが、戦争など昔の苦労話を聞きながらの仕事にいつも学ぶものがあります。

今後は、障害を持った高齢者であっても、車椅子で外出し、好きな買物ができ、友人に会い、地域社会の一員としてさまざまな活動に参加するなど、自分の生活を楽しむことができるような、在宅福祉サービスの充実を願っています。

### 高齢者のための スポーツ施設を

人間は年をとると、体力の衰えが目に見えてきます。体力の老化防止には、何よりもスポーツに親しむことが肝要です。自分の好みや体力に合わせて集団で実行したり、あるいは個人技を伸ばすこともできます。

幸い、大村の自然環境は素晴らしい。この環境を最大限に活用してスポーツの施設の充実を図り、市の中央部付近に高齢者用の体育施設や屋内、屋外の競技場、周りを緑の木で囲み、遊歩も可能で、そこを訪れると全てのスポーツを気軽に楽しむことができる施設を建設してほしい。

スポーツを通じて健康を保ちながら、心身ともに健全で明朗な生活を送ることができるようになればと思います。



古川敏夫さん・80歳  
(古町2丁目)

### 若い力で活性ある 10万都市大村に



松尾ヨシカさん・77歳  
(岩松町・主婦)

大村市の人口が8万人に達したというニュースを聞きましたとき、わが郷土のたくましさに胸が熱くなりました。福祉宣言都市として市民の福祉に力を注がれ、高齢者に対する配慮を有り難く感じながら暮らしています。

ところで、現在は高齢化が進んでいる反面、赤ちゃんの出産率が低くなってきています。このまま少子化が進むと日本は25年後には4人に1人は老人となるということです。このような少子化のとき、5人のお子さんを、愛情をもって産み育てられたお母さんを、何かのかたちで表彰していただきたいと思っています。

恵まれた郷土に若い力がはぐくまれ、活性ある「10万都市大村」が近い将来に実現しますことを願っているものです。



# おおむらの昔と今 写真集



▲ 昭和30年ごろ(日本で最も早く昭和27年に始まった大村競艇の横断幕が張られています)  
大村駅前

▼ 現在



▲ 大正時代末ごろ  
三城城跡から古町方面を望む

▼ 現在



▼ 鯨 大村湾にあがる



昭和12年、大村東浦で鯨が捕獲された。江戸時代ごろまでは、西彼杵郡外海の陸地近くでも鯨が見られたという。



▲ 昭和10年ごろ  
琴の浦橋から玖島崎を望む  
(現在の国道34号幸町付近)

▼ 現在



昭和10年ごろ

◀ 県立大村中学校ボートレース  
明治28年から校内ボートレースが行われ、多くの見物客で賑わった。